

森村桂

結婚てなあに

結婚てなあに

森村 桂

講談社



〈同じ著者による講談社の刊行物〉

森村桂パリへ行く
森村桂香港へ行く
森村桂沖縄へ行く
12の結婚
森村桂日本を行く
いわせてもらえば
森村桂アメリカへ行く
二年目のふたり
お嫁にいくなら
Lサイズでいこう
友だちならば
ダンナさまヒマラヤへ行く
お手伝いさんただいま三人
ビジョとシコメ

お隣りさんお静かに
青春がくる
おいで、初恋
ふたりは二人
結婚志願
チャンスがあれば
違っているかしら
恋するころ（上）
恋するころ（下）
それゆけ結婚
若さでいこう
森村桂宮殿に住む
ああ結婚

結婚てなあに



1972年7月12日 第1刷発行

著者 森村 桂

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112

電話 東京 (03) 945-1111 (大代表)

振替 東京 3 9 3 0

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

定価 380円

Printed in Japan © Katsura Morimura 1972

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

0093-125965-2253 (0) (文一)

結婚てなあに・目次

あげるものとは何事か

7

何の為に結婚するか

18

早婚がいいか晩婚がいいか

27

結婚は男の墓場か

43

天使は知らない

62

結婚とは化かすことなり

84

アカの他人が月給くれる

97

家を守るということは

110

家を建てるか夢を買うか

136

姑は我が生涯の宿敵

貫け悪妻の道

ノミの夫婦ばんざい

本妻よりも二号が有利

見込みなんて、なくていい

ふりむいた時妻がいる

愛とは離れぬことなり

誰の為の結婚か

154

169

188

200

220

229

250

265

装幀 〓 宮田武彦

結婚てなあに

本書は女性週刊誌『ヤングレディ』に「それゆけ結婚・第2部」として連載されたものをもとに新稿多数を加えてまとめました。

あげるものとは何事か

「あの、相談に乗っていただきたいことがあるんですけど……」

玄関に出たところ、名古屋から出てきたという若い女性が思いつめたように立っていた。今二十三歳で、高校を出てずっと会社勤めという。

「実は、縁談があるんですけど……」

「ええ」

「どうも、あんまり、気乗りがしないんです」

「……………」

だけど、親がどうしても結婚しろとでもいうのかな。今時、めずらしく古風な――。バカらしい、政略結婚の世の中じゃないんだ。二十世紀もあと四分の一とちょっとしかない大現代の時代である。そんなことで、いちいち会社休んで新幹線使って、相談に来てたんじゃ、いつま

でたつても、会社でOLの地位は上りやしないし、鈍行けずって、新幹線をふやそうなんて、バカな時代になるというもんだ。世の中とは、風が吹けば桶屋がもうかる。こうやって、思いもかけぬところで、おかしくおかしく狂ってき、なあんにも気がつかない当人が、

「女子だからって、お茶汲みばかりしなきゃなんないなんて法がありますか」

「女子は男子より、どうしてベースアップがひくいんですか。ちゃんと同じに働いてるのに」
「せっかく鈍行で旅行しようとしたら、ふざけてる。もう運行しないんですってさ。国鉄って、何考えてるのかしらね」

そして、

「社会が悪い」

などということにあいなり、赤軍などという恐ろしいものが現れ、これまた、おかしげにおかしげに狂っていったりする。困る、われらひとりひとりが、はて、自分がこうしたらどうなるか、二十世紀あと四分の一に生きる我ら大現代の若者たちは、そういう想像力を、常に持って生活していかなければ、やがて日本は、食べものでも空気でも、PCBの入っていないものはない。つまりまあ、PCBのお風呂の中で、アゴまでどころか、髪の毛のてっぺんまでダボツとつかり、その中でアップアップと泳ぎながら、

「あなた、さあ、会社へ行く時間よ、PCB」

「う、うーむ、PCB」

「パパ、早く起きて、ごはん食べようよ、PCB」という時代に、確実に正確に、完全に、なるのである。

「それで、聞いていただきたいと思ひまして……」

はて、何のお話でしたっけ、ええと、PCBじゃない……、どうも、私しや、やっぱりPCBにおへそのあたりまでつかつてきたと思われる。

「私、実は、忘れられない人がいるんです」

「え」

私は思わず、彼女を見た。そうか、相談というのは、そういうことか。はて、人の恋路は、何とかして手伝いたいタチの、おせっかいオッチョコチョイのアネゴモリ、

「あの……、それで、その方……」

現金にも、彼女をいたわるように応接間に導き、なるべく楽そうな椅子にかけさせて、あついあつい紅茶を淹れて、

「お砂糖はいくつ？」

「あの、いいんです。太るから」

あら、べつに、たいして太っちゃいないのに、そうか、しかし、彼女は適齡期、愛しの人の為に、あんまり太っちゃいかんのだ。

「それで、その方とは、御結婚の話？……」

私しや、目をキラキラさせ、身をのり出して、本題に入る。いいとも、任しておけ、たとえお見合の相手がどんなエリートサラリーマンで、好きな人が、食うや食わずの職なしオアニさんであつたところで、大丈夫だとも、今の世の中、若い二人が健康でさえあれば、食べていけないなんてことはないんだ。好きな人の方を選びなさい。

「いえ、それが……、彼の方は、私が想つてること、知らないんです」
「え」

やれやれ、それでは片想いか、昔の私そっくりだ。もつとも、だからといって、私に縁談があつたわけじゃないけれど。

「でも、どうしても、彼のこと、忘れられないんです。高校の時の先輩で、同じ音楽部だったんです」

「ええ」

「彼は、東京の大学に行つて、今は、大きな会社に勤めているんです」

「うん」

「夏休みとか、お正月に、名古屋に帰つて来たりする時、昔の音楽部の人たちが集るんですけど、そういう時、もううれしくて……」

「彼とは、個人的に会つたりしたことないの」

「ええ、ないんです。彼の友達に頼んで、彼のことよび出してもらいたいと、何度も思ったこ

とあるんですけど、でも、やっぱり、心のすみに、じっと秘めておいた方がいいんじゃないか
と思ったり……」

「ええ」

私はうなずいた。そうとも、片想いとは、初恋とは、その方が良いのだ。苦しいけれど。

「やっぱり、女の身から、そういうのは、いけないと思っただけです」

私はまたもや深くうなずいた。そうとも、そうとも。

「でも、年賀状と暑中見舞いは出していました。彼も、すぐ、返事、くれるんです」

彼女は、瞬間、顔を輝かしていった。

「そして、私、いつしか、思うようになったんです。いつか、必ず彼が、東京から、迎えに来
るって」

「ええ、解るわ」

私は、深くくうなずいた。そうなのだ、彼は、彼女にとって、たった一人の男性、王子さま
なのだ。青春時代を、そういう人をずっと想って生きたことは、幸せなことだ。たとえ、そ
れが若い日の夢で終わったとしても。しかし、それ故にこそ、青春は、こよなく美しい。彼女が
これからどういう人と結婚するか、どの程度の恋をして結婚するか解らないけれど、でも、十七
や八じゃないんだ。若き日、一度も恋をせずに結婚する、そんな味けない青春なんて、青春と
はいえやしない。

誰かを遠く恋して生きる女性、その人は、いつも美しい。常に、身も心も、美しく保とうとして生きる。いつか、きっと、彼が迎えに来る。だから、その日まで、美しくあろう。その日彼に、負い目を持たなくてすむように、彼を晴れわたった笑顔で迎えることが出来る為に、その人は、美しく生きようとする。たとえ、その結果、王子さまは違う人になって来たとしても。いいのだ、それでいいのだ。

そして、彼女はいった。

「でも、いつまで待っても、彼はプロポーズしてくれないし、来月は、もう二十四です。縁談もあるし……、私、たまらなくって、上京しちゃったんです」

「え」

それで、彼に真意を確めてくれというのだろうか。うーむ、むずかしいけど……、どうしたら、一番いいのだろうか。

と、彼女は一瞬口ごもったが、かすれた声でいった。

「なのに、彼に、恋人がいるって、聞いたんです」

「……………」

そうであったか。王子さまには、すでに、王女さまが、他にいたのか。

「でも、私、押しかけ女房でもいいんです」

彼女は、驚くほど強い目になっていった。

「私、東京の女の人になんか、負けません。家事は好きですし……、何よりも、何よりも、彼を愛してます、誰よりも」

彼女は、断言した。そんなこといったって、その女性だって、自分は世界一彼を愛してるっていうかも知れないよ。いや、何年も、彼を待ってたといいたいのだろう。解るとも、私だっ ていいなかったさ。主張して、押しかけ女房を決めたかった。でも、悲しいかな、愛というのは、そういう風に「比重」ではいけないのだ。いつか、愛というものを、計るハカリが出来たとして、あなたが、めでたく、

「いちばん重いです。あなたなら彼を幸せに出来ます」

と、えらい先生さまが保証してくれたところで、彼が、

「だけど、ぼくは向うの女の子の方が好きなんだ」

といわれれば、全てはパア。まあそういうわず実力をみていただきましょうといって押しかけ女房をきめたところで、相手はこういうだけだ。

「困ったよ、悪女の深情けなんだ」

もてない女は、最後まで、いやがられる。ええい、そんな男、こっちの方からソデにしろ！ そういったところで、何年間も燃えに燃え続けた恋の炎、片想いとならば、尚のこと想像が想像をよんで、イメージはふくらみ、もうどうしようもないってことは、私も解る。

「だけど、だけど私……」

と、彼女は、突然、涙をポロポロ流していった。

「もう彼に、あげるものがないんです」

「え」

私は、驚いて、彼女を見た。あげるものって、何を――。

「私、私、実をいうと、二十歳の時、大事なものを、ある人にあげてしまったんです」

「……………」

「私、その頃、会社のことも面白くなかったし、結婚にまでいくようなボーイフレンドも出来ないし、何か、いらいらしてたんです。彼のこと、好きだったけど、でも、あまりに遠い人に見えたし……。もう、どうせこのままいったって、理想の人なんて現れっこない。二十歳になったのに、自分は、何一つしてない。それで、二十歳になった時、その頃つき合ってた男の子に、あげちゃったんです。べつに、そんな罪悪感もなかったんです。ただ、大人になったか。この幼い自分をふっきりしたかった。それだけなんです、好奇心からかも知れません」

何と、何とバカなことを。今、そういう若い女性が多いというけれど、その気持は、全く解らないわけではないけれど、だけど、何と、バカな。片想いの人がいながら、一方では、どうしてそんなバカなことが出来るのだ。どうして、自分を大事にしておこうと思わないのか。もしも、その人を本気で愛しているのなら。片想いになんて、純粹であってほしかった。美しく、誠実であってほしかった。彼の為にはない、自分自身の恋の為に、せめて、報われぬ悲